

竪穴住居址の分類と機能

中山俊紀

1 分類

弥生集落の発掘調査で発見される遺構の代表に、竪穴住居址がある。しかし、不思議なことに竪穴住居址そのものの分類は、ほとんどといってよいほど今までなされていない。機能的にとらえどころが少なく、分類しがたいという側面が強いからであろう。平面形態の違いに注意が払われたり、特異な主柱配置に関心がよせられたりもするが、まとまって評価されることは少ない。機能については、特別大きなものや特殊な形態のもの、あるいは特別な遺物が発見された場合などに、それは首長の家、作業場、集会所、母屋などといわれる場合もあるが、必ずしも住居址全体のなかに位置づけられ、評価されているわけではない。したがって、それぞれの機能に基き竪穴住居址を分類し説明する、ということは、現状ではなはだ困難である。ここでは基本にかえり、まず形態を分類し、それぞれの違いが何に由来するのかを探ってみよう。

客観的な分類指標としては、平面形態、主柱本数、および規模の3要素があげられる。試みにそれらに基づき竪穴住居址を分類してみよう。基礎データは、津山市教育委員会が発行した調査報告書を中心に抜き出した、異なるタイプの住居址41例である。それらを類別すると、大まかには以下の13形態(図1)に分けることができる。

- 1 方形2本柱住居(天神原遺跡17号住居址)
- 2 長方形2本柱住居(西吉田北遺跡14号住居址・古墳時代?)
- 3 隅丸方形2本柱住居(沼遺跡G住居址、天神原遺跡11号住居址、緑山遺跡1号住居址)
- 4 円形2本柱住居(天神原遺跡14号住居址、西吉田北遺跡4号住居址)
- 5 長楕円形2本柱住居(稲荷遺跡B-c27号住居址)
- 6 方形4本柱住居(西吉田遺跡9号住居址、別所谷遺跡6号住居址、西吉田北遺跡12号住居址)
- 7 隅丸方形4本柱住居址(ビシャコ谷遺跡6号住居址、一貫西遺跡5号住居址、大畑遺跡1号住居址、大畑遺跡2号住居址、東蔵坊遺跡3号住居址、大開遺跡3号住居址)
- 8 円形4本柱住居(別所谷遺跡8号住居址、稲荷遺跡B-c23号住居址、小中古墳群7号住居址)
- 9 隅丸方形5本柱住居(西吉田北5号住居址、深田河内遺跡2号住居址、西吉田北遺跡11号住居址)
- 10 円形5本柱住居(ビシャコ谷遺跡7号住居址、西吉田遺跡7号住居址、大開遺跡1号住居址)
- 11 円形6本柱住居(別所谷遺跡7号住居址、大成遺跡1号住居址、金井別所遺跡1号住居址、稲荷遺跡C-b2号住居址)
- 12 円形7本柱住居(西吉田北遺跡8号住居址、別所谷遺跡3号住居址)
- 13 円形多柱(8本以上)住居(一貫西遺跡4号住居址、荒神峪遺跡1号住居址、大畑遺跡9号住居址、小原B遺跡1号住居址、小中遺跡4-27号住居址、天神原遺跡23号住居址、荒神峪遺跡6号住居址、小中遺跡1-33号住居址)

こういう類別が可能としてそれぞれの床面積を比較すると、当然というか、床面積と主柱本数の間に相関がみられる。そこで主柱本数を基準に床面積の平均をとると、2本柱住居は11m²、4本柱は15m²、5本柱は27m²、6本柱は38m²、7本柱は37m²、多柱構造住居は69m²という数字が得られる。この数字は基礎データが限定され、すべての住居に必ずしもあてはまるとはいえないが、主柱本数と住

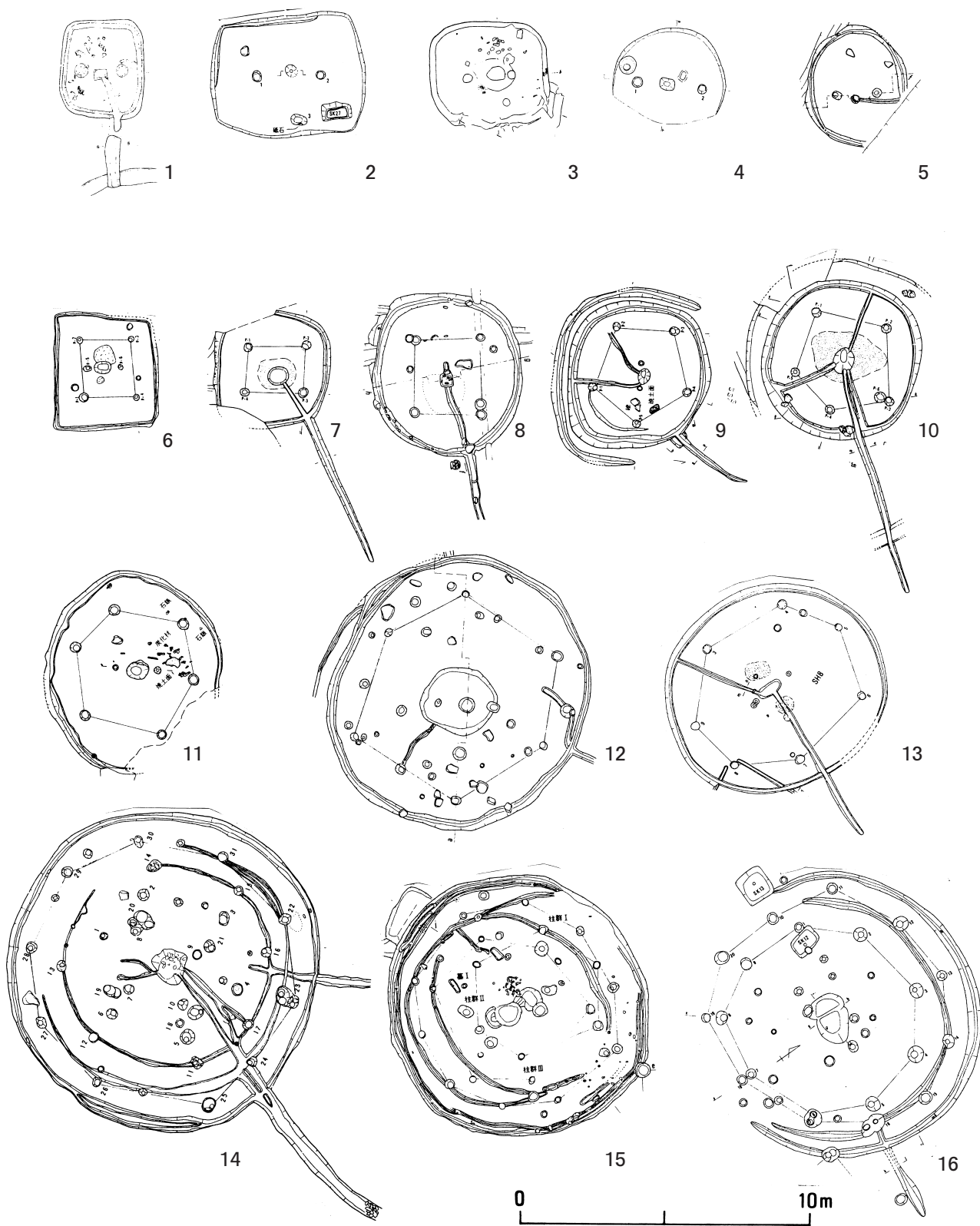


図1 竪穴住居址の平面形と主柱本数の比較（縮尺 200 分の 1）

1 方形 2 本柱（天神原遺跡）、2 長方形 2 本柱（西吉田北遺跡）、3 隅丸方形 2 本柱（沼遺跡）、4 円形 2 本柱（西吉田北遺跡）、5 長楕円形 2 本柱（稲荷遺跡）、6 方形 4 本柱（西吉田遺跡）、7 隅丸方形 4 本柱（ビシャコ谷遺跡）、8 円形 4 本柱（稲荷遺跡）、9 隅丸方形 5 本柱（深田河内遺跡）、10 円形 5 本柱（ビシャコ谷遺跡）、11 円形 6 本柱（金井別所遺跡）、12 円形 6 本柱（稲荷遺跡）、13 円形 7 本柱（西吉田北遺跡）、14 円形多柱（天神原遺跡）、15 円形多柱（小原B遺跡）、16 円形多柱（荒神峪遺跡）

居床面積との一般的な相関関係を反映しているとみるには十分なものであろう。

そこで、柱本数と床面積を基準とすれば、竪穴住居址の一般的な層化が可能である。一は、床面積の狭い2、4本柱住居、二は極端に面積の大きい多柱構造住居の二者として区分でき、三としてその中間に位置する6、7本柱住居があるということになる。層化からみれる5本柱住居については一、三の中間に位置し、両者の性格を併せもっていると考えられるが、4本柱住居の変異とみられる例も少なくないので、とりあえず一に含めて考えることとする。その上で説明の便宜上一をA類、三をB類、二をC類と呼び、5本柱住居については必要に応じAⅡ類と区別する。

2 類型比率

こう分類した場合、平面形態の差はA類住居に限定されるので、主柱本数に着目したこの三分類が、もっとも竪穴住居址の差を反映しているといえよう。そこで、既に発掘調査がおこなわれた津山周辺の遺跡の竪穴住居址類型別存在棟数を大雑把に数え上げると、右表のようになる。

この表の集計によると、A類は常に80%前後を占め、A類とB・C類の構成比率は中、後期とも約4：1で安定していることがわかる。仮にA類を小形住居、B・C類を大形住居とすると、小形住居と大形住居の割合は、弥生時代を通じて常に4：1程度であったとすることができる。

住居分類	A	B	C	計
中期遺跡				
崩レ塚A地区	1		1	2
西吉田北	6	2		8
深田河内	2			2
別所谷	5	2		7
ビシャコ谷	6			6
一貫西	4		1	5
押入西B地区	11	3		14
サンプル小計	35	7	2	44
中期構成比	80%	16%	4%	
後期遺跡				
大畑	13	1	1	15
小原	12	3		15
西吉田北	6	2		8
荒神峪	5		4	9
一貫東	7	2	2	11
天神原	22	2	1	25
大田十二社	13	3	1	17
サンプル小計	78	13	9	100
後期構成比	78%	13%	9%	
サンプル総計	113	20	11	144
全体構成比	78%	14%	8%	

表1 住居類別分布表

3 個別集落

津山を中心としてみた弥生時代の竪穴住居址一※重複住居は、最大規模のものを代表させ、多重代替住居を一括して1棟と勘定している。

般の存在様式が推定できたので、以下、中期と後

遺構形式	竪穴住居				長方形竪穴住居状遺構				掘立柱建物					備考
遺 跡 名	C	B	AⅠ	AⅡ	A	BⅠ	BⅡ	Ⅵ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	
崩レ塚A地区	1		1			1								
崩レ塚B地区			1				1							
西吉田北		2	5	1										
押入西B地区		3	9	2	2	1		?2	2	1	4	1		
糶山		1	3	1			1	1	2					
ビシャコ谷			5	1		1								
金井別所		1	?2											
深田河内			1	1			?1							
別所谷		2	5			1		2	5	1	1			
一貫西遺跡	1		4					?1				1		
計	2	9	36	6	2	4	3	6	9	2	5	2		

表2 中期集落遺跡遺構分布表

※長方形竪穴住居状遺構と掘立柱建物の分類については前号（「年報津山弥生の里第8号」2001）を参照。

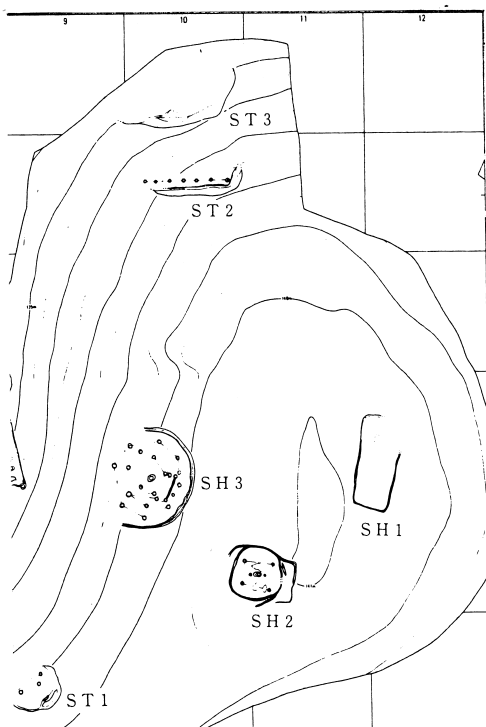


図2 崩レ塚遺跡 A 地区 (縮尺 1/600)
SH3 : C 類、SH 2 : A I 類、SH 1 : 長方形竪穴住居状遺構

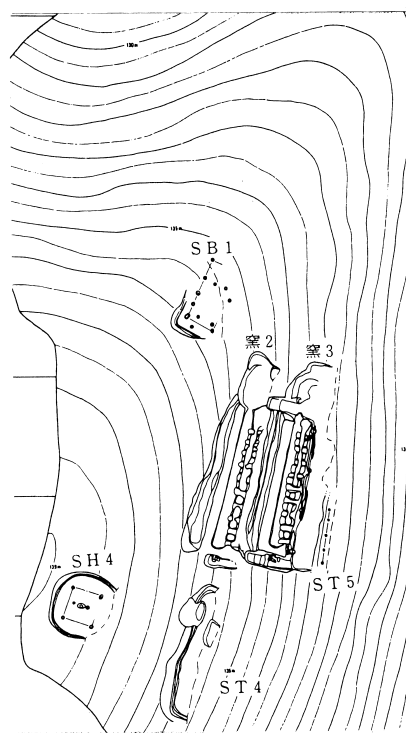


図3 崩レ塚遺跡 B 地区 (縮尺 1/600)
SH4 : A I 類、SB 1 : 掘立柱建物Ⅳ

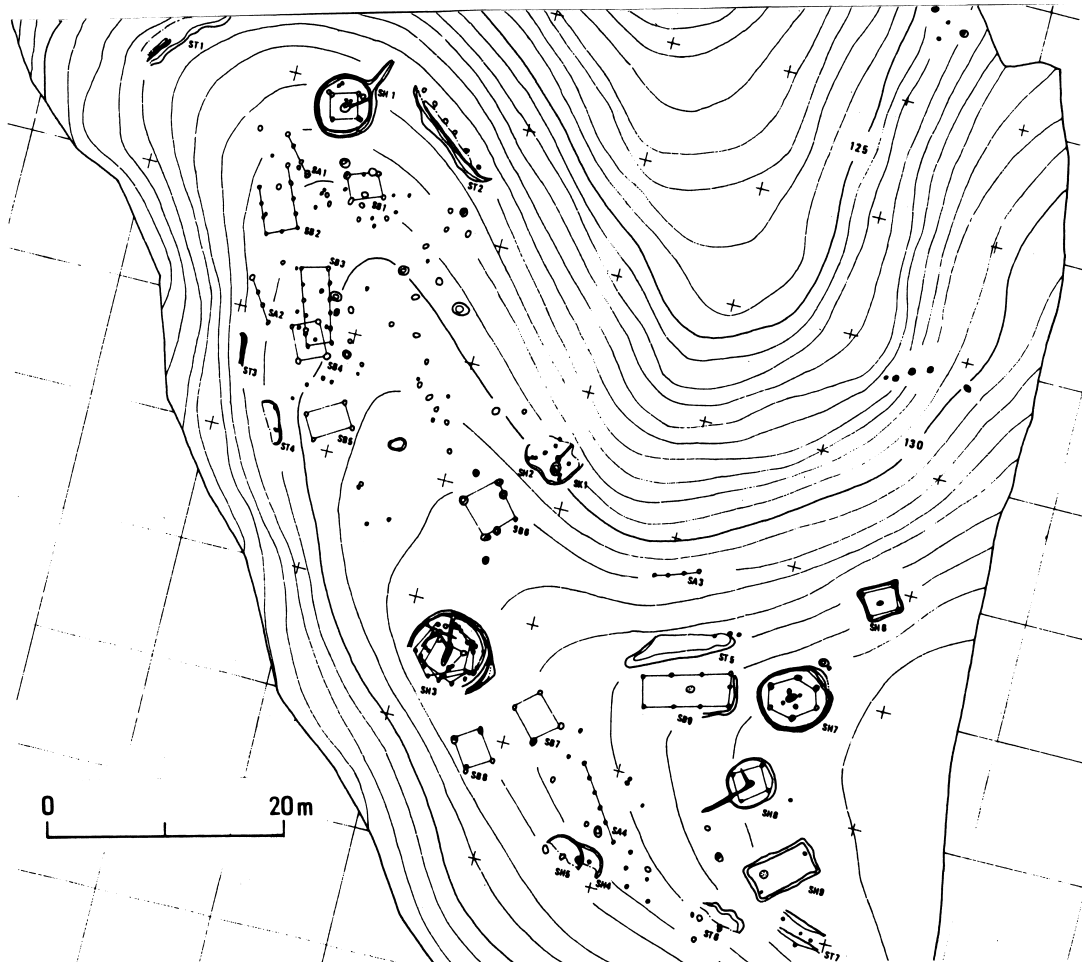


図4 別所谷遺跡 (縮尺 1/600)
B 類住居 : SH 3、7、A 類住居 : SH1、2、6、8、長方形竪穴住居状遺構 : SH 9、掘立柱建物Ⅵ : SH 2、3

期の遺跡に分け、集落ごとに住居の相互関係を探ってみたい。

(1) 中期集落

中期の場合、竪穴住居の相互関係をみる上で、住居以外の建築物と住居の関係もまた重要とみられるので、まず主な建築物一般の構成がどのようになっているのかを、あらかじめみておこう。表2は、すでに調査された中期集落の建物構成一覧表である。

この表には、分類上不確実なものも含まれるが、総数 86 遺構の構成比率をみると、竪穴住居址 53 に対し長方形竪穴住居状遺構 15、掘立柱建物 18 で、それぞれ 62%、17%、21% という数字が得られる。竪穴住居址に比べ、長方形竪穴住居状遺構や掘立柱建物跡は少なく、また、遺跡による発見変異も大きいという特徴がある。それらは竪穴住居址と比べ残りにくく、また発見されにくいという特性があるためとも考えられるが、今後調査が進んでも、それらの構成比は、竪穴住居数を大きく上まわるという可能性は小さいように思われる。そこで、この構成比を、当時の一般的なありかたと、暫定的に想定することとしよう。

崩レ塚遺跡(図2、3)中期中葉の継続期間が限定された遺跡で、弥生集落はA、B二地区で調査されている。A地区では、竪穴住居址C類1棟、A類1棟、長方形竪穴住居状遺構BⅠ1棟、性格不明の段状遺構、B地区では、竪穴住居址A類1棟と掘立柱建物1棟、段状遺構1が発見されている。このA・B両地区はそれぞれ独立しているので別個の遺構群とみてよいが、このB地区の掘立柱建物はⅥ類の特徴をもち、長方形竪穴住居状遺構と同種とみられ(前号)、またA地区は本来A類住居1棟のみで成り立っていたとは考えにくいので、BないしC類住居の存在を補って考える必要がある。ということになれば、崩レ塚遺跡はA・B両地区とも、竪穴住居址A類、B・C類プラス長方形竪穴住居状遺構で成り立つ同一構成の住居群とみることができる。

別所谷遺跡(図4)別所谷遺跡は、群分けの可能性もあり、やや複雑な構成をとる中期後葉の遺跡である。そこでは、建替え痕跡を残すものと残さないB類住居計2棟と、A類住居5棟の総計7棟の竪穴住居址が発見されている。それに、長方形竪穴住居状遺構BⅠ類が1棟、同種とみられる建物Ⅵが2棟および掘立柱建物Ⅰが5棟、Ⅱが1棟、Ⅲが1棟ある。多様な遺構が出揃っているところから、住居址も本来存在したものの多くが発見されているとみてよく、B類住居2棟に対しA類住居5ないし6棟をやや上回る構成比率で住居群が存在したとみることができる。遺構構成は、竪穴住居址7棟(重複それぞれを1棟とみれば14、以下同じ)、長方形竪穴住居状遺構3棟、掘立柱建物7棟ということになり、構成比率は、41%(58%)、18%(13%)、41%(29%)である。B類対A類住居比は2:5で、うちB類の3号住居のみたびたび建替えを繰り返している。

(2) 後期集落

序列的組み合わせ

後期の集落遺跡は長期継続形が多く、各時期の遺構が重なって評価が複雑なので、そのなかでも存続時期が比較的限定された、後期前葉の小原遺跡と大畑遺跡をまずみてみよう。

小原遺跡(図5)住居址は大きく2箇所に離れて存在したが、そのうち遺構が集中するB地区には竪穴住居址B類3棟、AⅡ類1棟、AⅠ類7棟があつて、掘立柱建物址はⅠ類が1棟、Ⅱ類が2棟近接して残されていた。建替えの痕跡を多数残す住居址も含まれることから、継続居住されたとみられ、各住居は4ブロックにまとまる傾向がある。仮にA、B、C、Dブロックとそれぞれ名づける。

そうすると、AブロックにはB類住居が2棟、AⅠ類住居が1棟、BブロックにはB類住居が1棟、



図5 小原遺跡（縮尺 1/600）

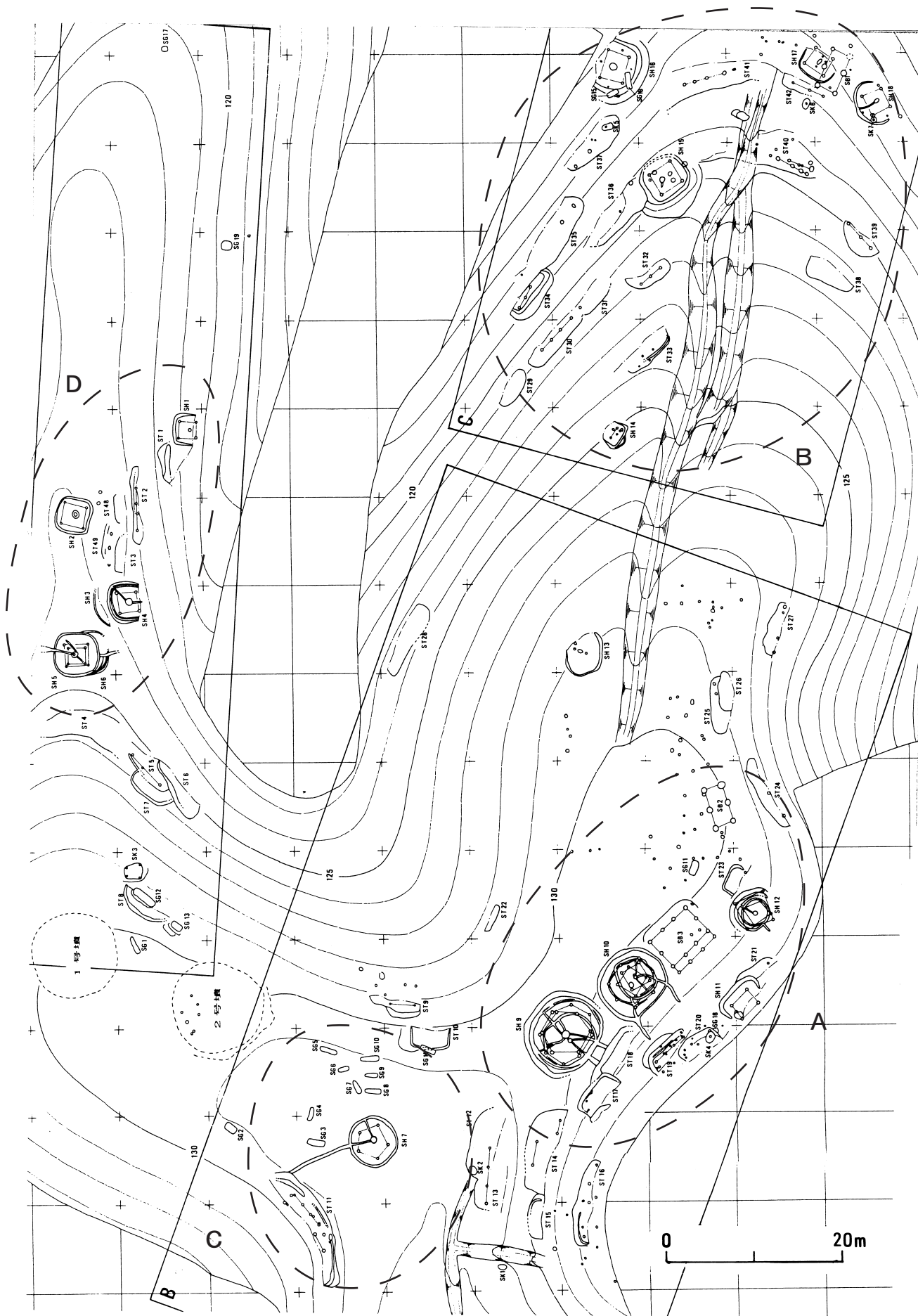


図6 大畑遺跡 (縮尺 1/600)

AⅠ類住居が2棟、CブロックはAⅡ類住居が1棟のみ、DブロックはAⅠ類住居3棟のみという構成となる。高床倉庫とみられる掘立柱建物3棟は、いずれもAブロックを囲むように存在する。

大畑遺跡(図6)住居の近接関係から小原遺跡と同様の群分けをすると、おおむね4ブロックに分かれる。それぞれA、B、C、Dとすると、AブロックはB・C類住居各1棟、AⅠ類住居1棟、倉庫と考えられる建物跡1棟、BブロックはAⅠ類住居3棟、高床倉庫1棟、CブロックはAⅡ類住居1棟、DブロックはAⅠ類住居4棟で構成されるということになる。以上をまとめると、以下のようになる。

小原遺跡

Aブロック 「1AⅠ－2B類住居＋3倉庫」

Bブロック 「2AⅠ－1B類住居」

Cブロック 「1AⅡ類住居」

Dブロック 「3AⅠ類住居」

大畑遺跡

Aブロック 「1AⅠ－1B・1C類住居＋1倉庫」

Bブロック 「3AⅠ類住居＋1倉庫」

Cブロック 「1AⅡ類住居」

Dブロック 「4AⅠ類住居」

そもそも近接して存在する住居はおおむね1棟の軌跡とみなせるので、両者の全体構成を比較すると極めてよく似ていることが分かる。また、Aブロックの住居に建替傾向が強く倉庫が近接するなど、住居群の構成パターンを推測する上で非常に興味深い。やや異なるのは、小原遺跡のBブロックにB類住居が存在し、大畑遺跡のBブロックに倉庫が含まれる点であるが、ともにAⅡ類住居が独立して存在するなど両者はほとんど同じ住居群構成をとり、B・C類住居＋AⅡ類住居1棟＋AⅠ類住居複数棟という基本パターンで構成されていたとみることができる。

並列組み合わせ

それらと対照的な構成をとる、ほぼ同時期の遺跡に荒神峪遺跡がある。

荒神峪遺跡(図7)中・後期にわたる集落遺跡で、遺構の所属時期が多様な上に、正確な所属時期不明なものが多い。そのため、住居の共存関係を推定することはなかなか困難であるが、後期前葉の住居だけは関係が比較的明らかで、そのC類住居3棟すなわち1号住居址、6号住居址、12号住居址は等間隔に併存していたらしい。12号住居址と6号住居址の間隔は約70m、6号住居址と1号住居址との間隔は約60mで、それぞれ住居占地最適部分にあたかも全体計画に沿ったようにきれいに並んでいる。それぞれのC類住居にA類住居が付随した可能性はあるが、C類住居の分散分布の状態は明らかに小原遺跡や大畑遺跡のありかたとは異なっている。ただし、こういった住居群構成が考えられるのは荒神峪遺跡のみで、実際そういう例があるのかどうかは今後の検討にかかっている。

このように中期中葉の崩レ塚遺跡、後葉の別所谷遺跡、後期前葉の小原遺跡、大畑遺跡、荒神峪遺跡と竪穴住居の類別に基づき時代順に住居群の構成を検討してみると、荒神峪遺跡のようなありかたが実際にあったとしても、住居の群構成をみる場合はわずかに二つのパターンに収斂されるという結果が得られる。すなわち、崩レ塚遺跡、別所谷遺跡、小原遺跡、大畑遺跡でみたように、BないしはC類を中心にしてA類数棟で構成されていたとみられる序列型ともいうべきものと、あったとすれば荒神峪遺跡

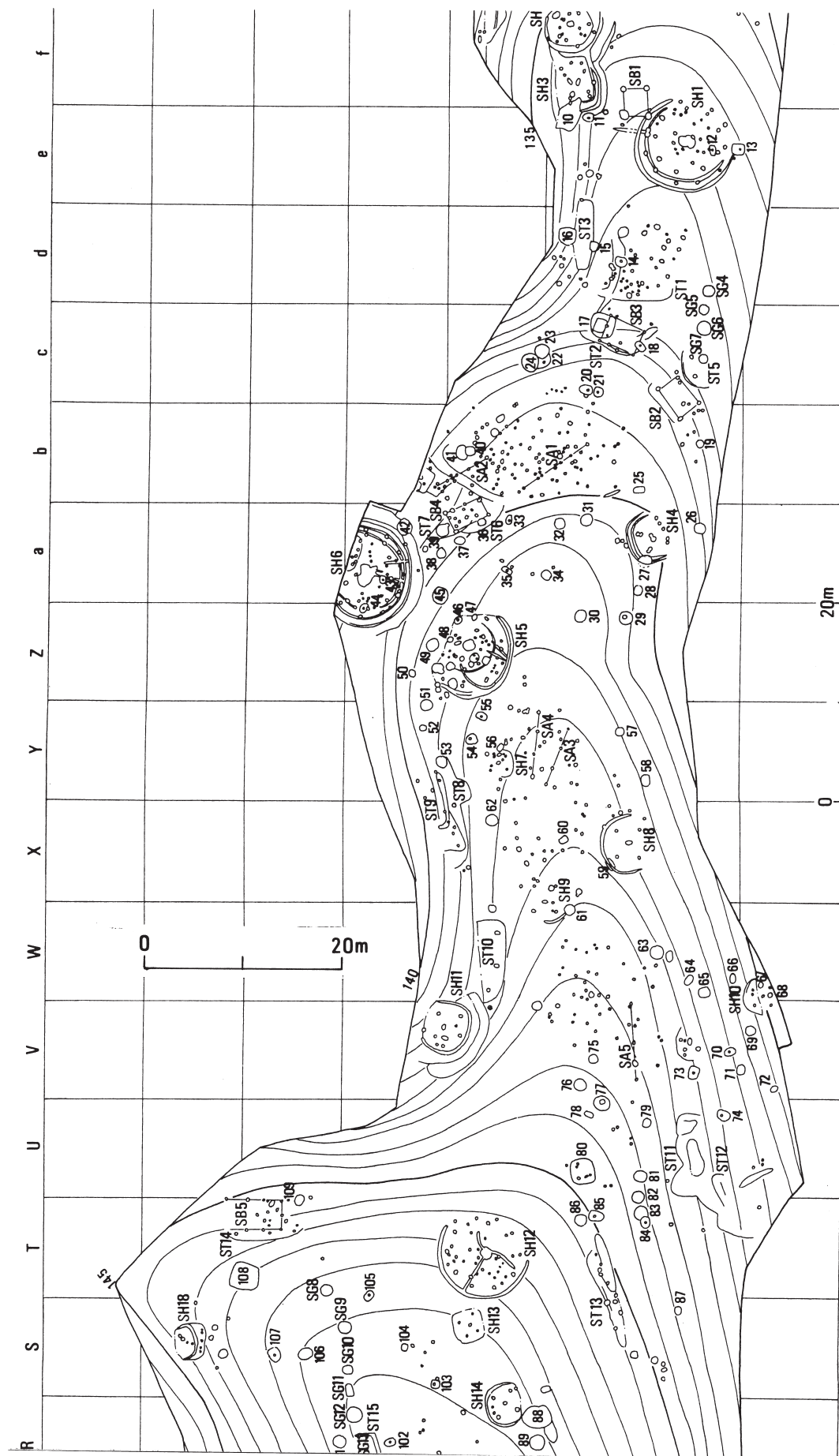


图7 荒神峪遺跡 (縮尺 1/600)

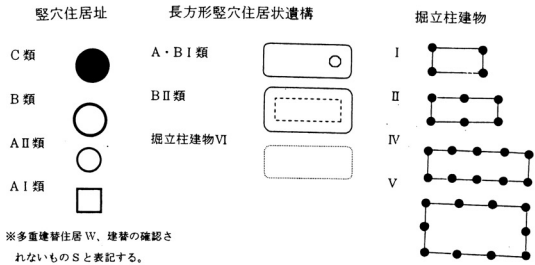
の後期前葉住居址群のように、C類住居が並び建つが如き並立型ともいべきものの二つである。しかも、荒神峪遺跡はその推移からみて、その後序列型の住居群構成に変化するようであり、一貫して存在するのは序列型の住居群構成のみとみられる。

ところで、以上の遺跡では、主として共時的関係が押さえられたが、通時的にはどうだろう。大田十二社遺跡（図8）は、後期初頭から終末まで継続して居住されていた遺跡で、そこで発見された15棟の竪穴住居址は、近接関係からおおむね4群に分かれた。それら住居には建替え痕跡を残すも

遺構 遺跡 種別	竪穴住居址				長方形竪穴住居状遺構	掘立柱建物	備考
	C類	B類	AⅡ類	AⅠ類	A、BⅠ、BⅡ、建物Ⅵ	建物Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ	
崩レ塚遺跡 A地区	● S×1			□ S×1	○ ×1		
崩レ塚遺跡 B地区	?	?		□ S×1	○ ×1		
別所谷遺跡		○ S×1 W×1		□ S×5	○ ×1 ○ ×2	Ⅰ×5 Ⅲ×1	
小原遺跡		○ S×1 W×1	○ S×1	□ S×5 W×2		Ⅰ×1 Ⅲ×2	
大畑遺跡	● W×1	○ W×1	○ S×1	□ S×10 W×1		Ⅰ×2	

表3 集落遺跡の遺構構成

凡 例



のが多く、それを1棟と数えていくと、おおむね40棟前後の住居が存在していたということになる。そのそれぞれを4ブロック4時期に区分し、住居類別に分ければ右頁表のようになる。

この表だけでは分かりにくいので、時期別の住居群構成を記号化して表示すると、つぎのように表せる（wとは建替えの存在する住居、sとは建替え痕跡がみられない住居）。

- 1期 AⅠw-AⅠs
- 2期 B・C-AⅡ-AⅠw-AⅠs
- 3期 B・C-AⅡ-AⅠw-AⅠs
- 4期 B・C-AⅡ-AⅠw

1期にB・C類住居は欠けるが、それは本来なかったのか発見できなかったのかははっきりしない。しかし、こう整理してみれば、大田十二社遺跡も他の遺跡同様、序列的な構成をもって継続推移した集落とみることができる。

住居類型	B・C類	AⅡ類	AⅠ重複	AⅠ単純
1期			19 (15) 号、4-4-4-4H、(C)	9号、4、(D)
2期	12号、6-6 (A)	14号、2-4-4-4- (5)、(B)	8号、4-4H (D)	3号、4、(D) 10号、4、(C)
3期	16号、6 (D)	13号、4- (5) -5、(D)	6号、4-4、(A)	18号、4、(B)
4期	1号、4-4-4-4-7 (C) 4号、(7-8) ×X (A)	5号、5 (A)	2号、4-4、(B)	
変遷	A-D-C-A	B-D-A	C-D-A-B	D-D-C-B
棟数	4	3	4	4

表4 大田十二社遺跡の住居群構成

＊住居の後の数字は支柱本数の推移を、Hは住居中心が移動していることを示す。また、()内は所属ブロックを表す。

そうすると、弥生時代の集落遺跡は、序列構造をもつ住居群が基本となる統一体であったという結論になる。荒神峪遺跡のような並立的な住居群構成が実際存在したとすれば、それは序列的な住居群構成に対し、個別住居が自立化した結果と推測できる。

4 機能推定

そこで遺構群の性格を判断するために焦点となってくるのは、住居類型として区別されるものの実体が何かということになる。それぞれの特性を整理してみよう。

A類 ・一貫して全住居の8割を占めることから、一般的な住居とみてまず間違いない。個別的にみれば、特殊化したもの、また別用途に転用されたものも含まれようが、それはこの場合例外的存在とみてよい。ただしAⅡ類の住居にはやや異なる要素をもつものが含まれる可能性のあることが、小原遺跡や大畑遺跡で垣間みえたので、この差異については、今後資料の増加をまって再検討する必要があるだろう。

B・C類 ・C類住居については巨大なものが含まれ、特殊な用途が考えられたりするが、すでにみてきたように、小住居群の構成要素としてB類またはC類のどちらかが存在するという場合が多く、両者は機能的に同じである可能性が高い。B・C類住居とA類住居の構成比は、中・後期とも1対4と安定しているので、それが弥生時代の住居群構成の基本的なあり方を示しているとみてもよい。現実の住居群は、必ずしもこの構成で営まれていたとは限らないが、その関係からみれば、B・C類住居は住居群の中心的家屋ということになる。復元される住居外観も、A類住居とはさうとう異なる印象を与える。

- ・倉庫とみられる建物が隣接したり、度重なる建替えの痕跡を残すものが多い。
- ・石製あるいは鉄製工具などが発見される頻度が高く（註1）、手工業的生産が活発におこなわれた形跡を残しているものが多い。その点で、大型の竪穴を工房とする意見も根強いが、石器製作や織布などにみられるように、弥生時代には居住の場と手工業生産の場が一般に未分化で、活発な生産活動がその空間でおこなわれたとしても、そのことをもって工

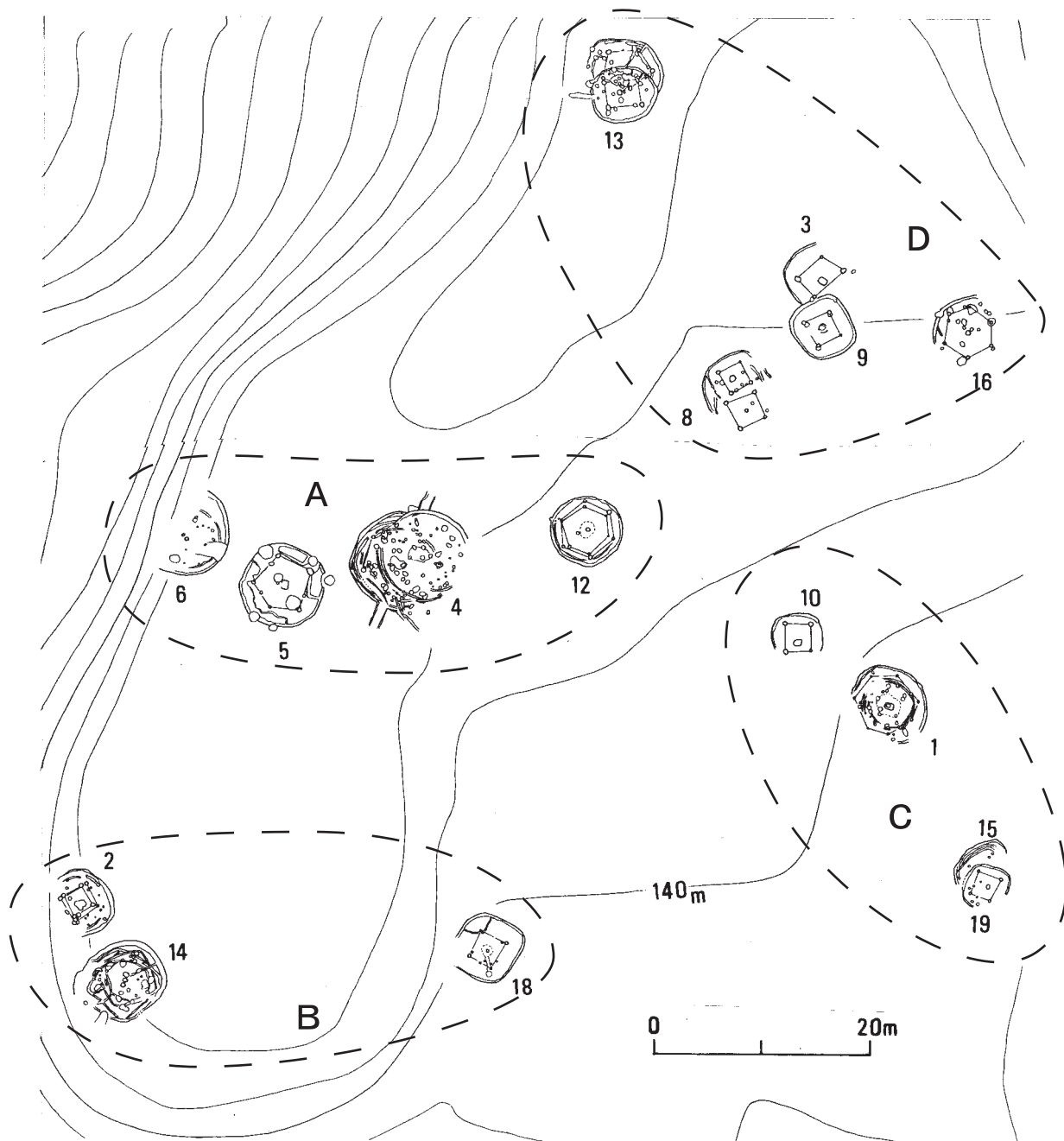


図8 大田十二社遺跡 (縮尺 1/600)

房とするのはあたらない。

- ・荒神峪遺跡では、特殊な地位を象徴する遺品とみられる銅釧の破片がC類住居から発見されている。住居群を代表する人物が、もっぱら占拠する場であった可能性が強い。

ところで、このように捉えられた小住居群の実際の居住員数を推定するとすれば、各竪穴あて4～5人が想定され、統計上（もちろん遺跡にあらわれた累積的な結果上の数字であるが）は5棟が一単位となるので、全体は4～25人程度と割り出せる。この数字は、根拠薄弱とはいえ、あたらずとも遠からずといえる。そうすれば、小住居群であらわせる集団はせいぜい25人ほどで、B・C類住居はその集団の長の生活空間にあてられる可能性がもっとも高い。ひらたくいえば、小住居群は大家族の生活空間をあらわし、B・C類住居は、家長の居住空間ということになる。

以上のような仮説は一応成り立ちうるが、この分類で重要なことは、当時の人々がどのように住居を類別していたかということである。形態から推定した A I、A II、B、C 類の住居分類が、それとどこまで折り合えるかという点については、今後に残された大きな課題といえよう。とはいえ、一点確実なことは、条件を整えば住居群の構成かくあるべし、という理念が、当時の人々の共通認識としてあったにちがいないということである。それがあからこそ、住居群の組み合わせに一つの型がみいだせたのだらう。今後、住居群の分析で問題としなければならないのは、その型であると思う。

註

- 1 津山市内の弥生住居址で、鉄製工具類が発見されているものが 16 棟ある。住居類型別では A 類 7 棟、B 類 3 棟、C 類 6 棟である。A : B・C 類の比率は 7 : 9 ということであるが、A : B・C 類住居の比率は 4 : 1 なので、鉄器出土の住居址は圧倒的に A・B 類住居に多いといえる。また、A 類住居の場合も、平均床面積をとると 28 m² という数字が得られ、床面積の広いものに偏る傾向がみられる。

図、表出典

「天神原遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第7集	岡山県教育委員会	1975
近藤義郎・渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」津山郷土博物館考古学研究報告第2冊		津山市・津山郷土館	1957
「緑山遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集	津山市教育委員会	1986
「小原B・稲荷遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集	津山市教育委員会	1990
「西吉田遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集	津山市教育委員会	1991
「別所谷遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集	津山市教育委員会	1994
「東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告書」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集	津山市教育委員会	1981
「大開遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集	津山市教育委員会	1994
「二宮大成遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第6集	岡山県教育委員会	1973
「金井別所遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集	津山市教育委員会	1988
「荒神遺跡」『橿山遺跡群Ⅰ』	久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会		1979
「小中古墳群」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第7集	岡山県教育委員会	1975
「小中遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第7集	岡山県教育委員会	1975
「沼E遺跡Ⅱ」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集	津山市教育委員会	1981
「沼E遺跡」	岡山県埋蔵文化財報告9	岡山県教育委員会	1979
「崩レ塚遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集	津山市教育委員会	1989
「西吉田遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集	津山市教育委員会	1991
「深田河内遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集	津山市教育委員会	1988
「別所谷遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集	津山市教育委員会	1994
「ビシャコ谷遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集	津山市教育委員会	1984
「一貫西遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集	津山市教育委員会	1990
「押入西遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第3集	岡山県教育委員会	1973
「押入西遺跡」	岡山県史第18巻 考古資料	岡山県	1986
「大畑遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集	津山市教育委員会	1993
「小原遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集	津山市教育委員会	1991
「西吉田北遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集	津山市教育委員会	1997
「荒神嶺遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集	津山市教育委員会	1999
「一貫東遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集	津山市教育委員会	1992
「大田十二社遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集	津山市教育委員会	1981